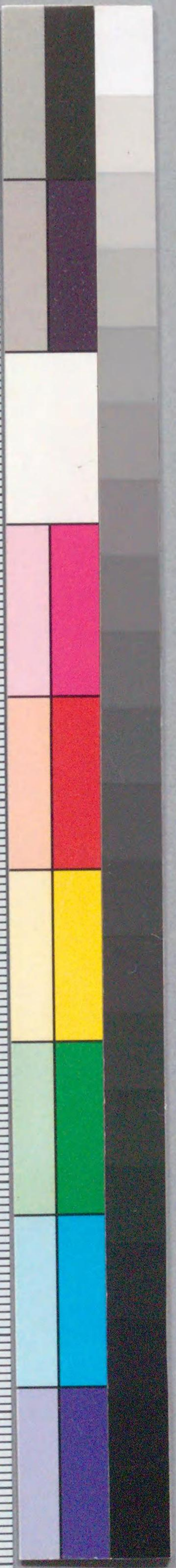
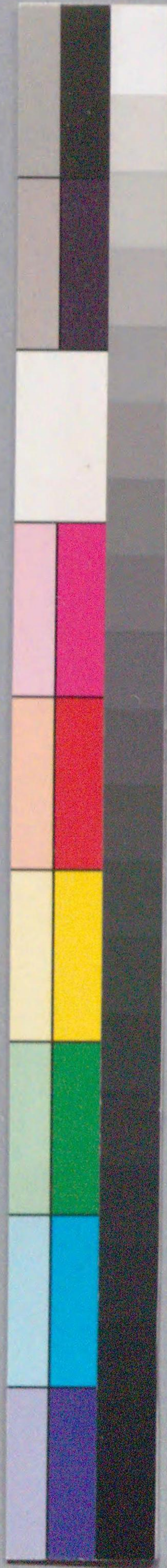




国立国会図書館 敵討枕石夜話 2巻 208-163



ガラス使用



208
2
163

觀音利生
曲亭主人著
一併齋画
敵討枕石夜話
孤館記傳
卷之上
徳齋堂梓

子
二

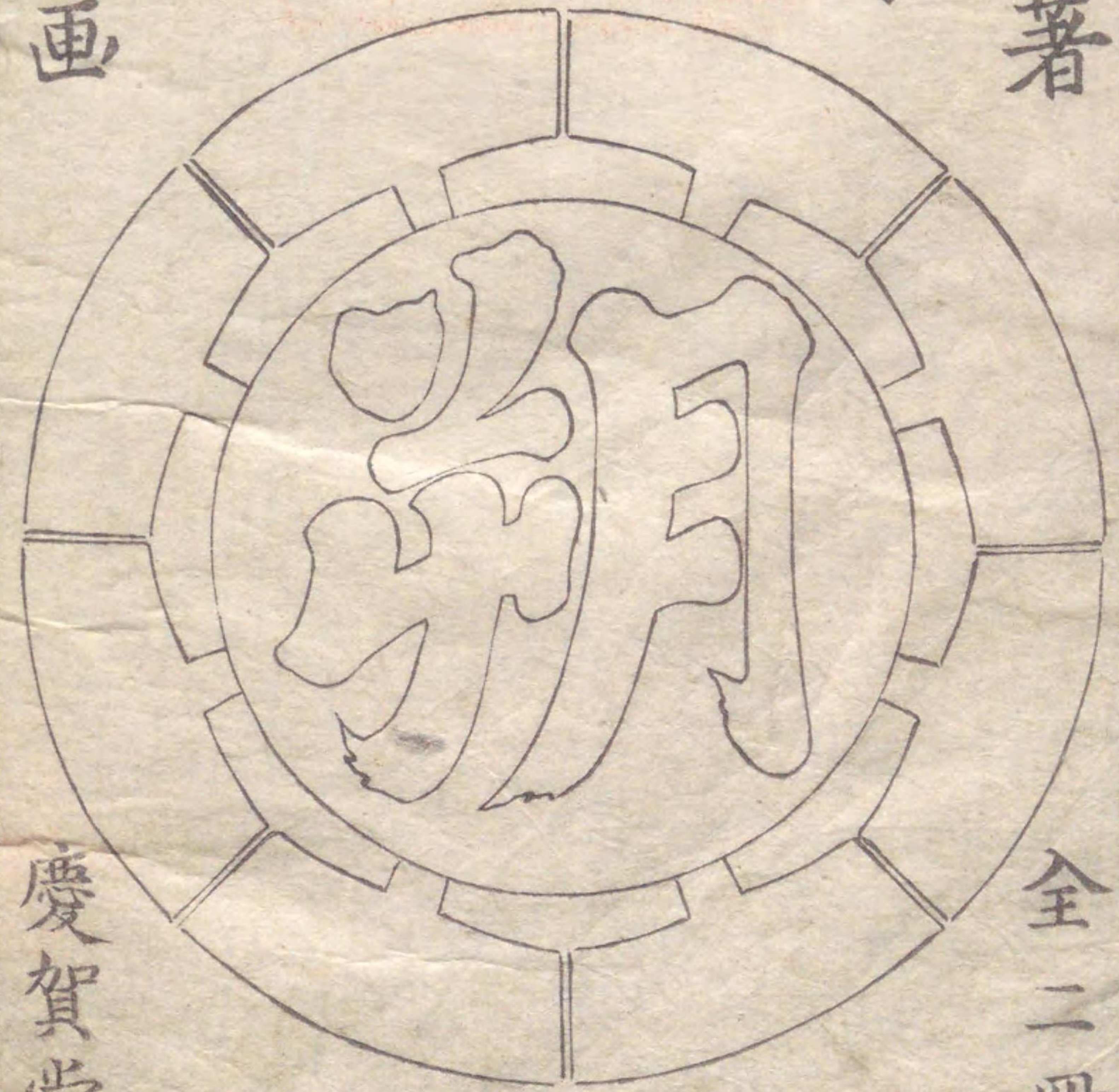


写

曲亭馬琴著

敵討 枕石 夜話

歌川豊廣画



全二冊

慶賀堂

敵討枕石夜話引



むう浅草みありの石の枕に奇談へ古歌あも見えそ。

今より同婦人の口頼とともあられともその傳もとと迄大同

小異全壁をいんごの一二及び宗紙法師が回國記ふ

後草より所みままりけりふらの里は海より石枕とる

ゆしきり石ありその故とる移る且中比の東一少中

ありえんがよとあつひ侍のむとめを一人もちけり見容色

おゆきよのほくくろのちいさむとを推すはるる

枕石夜話上



懺悔し、いよのむとめは菩提とぬくともひ
侍りて、おとづると傳へざるも、古老のまじり。

宗祇

しるお打ち世も、やうに石枕をもちてひらきん

又一説も、しるおのまじり、
浅草寺境内 妙音院の辺に 人家もあつて旅人

やうに、おのまじり、野中のまじり、家あり老婆

ひらの娘とも、住り此菴に、旅人とまじり、石の

枕とせよ、上より石を、おと、頭と打ち、おのまじり

装とせよ、おのまじり、池へおのまじり、ぬか、おのまじり

すくお九百九十九人、おのまじり、千人、おのまじり、一人の旅人

やうに、浅草の観音、おのまじり、おのまじり、おのまじり、おのまじり

そのまじり、おのまじり、おのまじり、おのまじり、おのまじり

おのまじり、おのまじり、おのまじり、おのまじり、おのまじり

おのまじり、おのまじり、おのまじり、おのまじり、おのまじり

おのまじり、おのまじり、おのまじり、おのまじり、おのまじり

枕石夜話

二



果と示と石塊のりあるとあらばらとを同じく點石ん
 や將蛇足の辨とせんや。あつふ彼石流千漱の
 石と枕とよめる人よ伴まぢ悪懺刻刺する老婆
 が為不客か迎ふ亦憐べし且九層の臺も石より
 ぎざれば成らば長隄の水も石みあらばら決せど
 石を智あし却右情お切あり人の多智あし
 遂み碌々たるを耻と思はると甚し芋の人玉と見えん
 十襲く宝と石と見えん卑くるとれと捐夫あは
 ぞりれども錢と易く石の卑くるとも錢と難し
 風雨は沐浴し霜雪は装ひ花は眠り月を嘯る安然とて
 天地と壽とをひとく設夫安危存亡と論とるは玉の
 石の及ぶると遠く宣うるうか今右幾億万の老小狐屋の
 物語を聞くもの老婆が暴悪は齒と切るとりども人死撲
 石と罪せられ他なし石の怒あし原人と教との
 ら強ふるといふはまぢがまり故か人寡慾さぬと死
 よく他の疑いと避せ智するとも壽し船とぞぬ

枕石夜話

五



らんや。

この冊子ハりぬる丙寅の年雷鳴月下旬倉卒に際し
草と起し草とるる中央に止むるを今茲に
賀堂のめしその草稿と獲り梨棗を登せんとす
ふくく嗣録しく首尾二巻と更小校正しくその雷
應むとす。

文化丁卯年申月中浣

著作堂主人誌



枕石夜話 目録上
浪乃山戸五郎の傳附
牛島村由来
朝茅五箇年懐妊附
石枕乃縁故



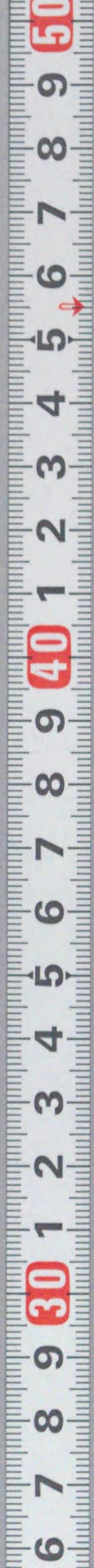
夜更し
 蛇
 海
 神
 乃石
 一人

一ツ家のうを

戒之戒之
 出乎爾
 者反
 乎爾
 者也
 蛇

むきめ駒方

枕石夜話上





牛 海の 角 あ けみ けり 叢 笠

浪山丸五郎

弱 水 玉 心 菜

將 以 豐 鐘

石濱要右衛門

抄 石 夜 話 上



松石夜話

目録下
 圓通菩薩了氏朝芽代
 徳山附今之原紀原圖通菩
 薩了氏朝芽代附花方
 の廣く權輿為通菩薩了氏
 朝芽代附蛇塚の事迹

記傳 敵討枕石夜話卷之上

曲亭馬琴纂補

浪の山戸五郎が傳附牛嶋綾瀨川の由来
 人皇八十一代後深草院の建長年中上徳園海上郡浪の山
 麓戸五郎といふ猶師ありたり。その人とあり。勇たれども義
 理不疎く。剛又似く怒ふりし。さうふらつて神祇と崇す。釋
 教を信せしむ。只旦夕山獵漁獵して殺生のくふ日を送り。
 年中積て凡八七父母の往り世を辭し。家より妻と幼少
 死女児只ひとりありり。彼浪の山といふ海邊より一



ころ高山たかさんあるれば戸五郎とごろうのめづる海陸うみりくの呀作あやさも馴なれくは乃
 随まふ奉止ほうしたり。あるふある日の夕ゆふぐれは戸五郎とごろうのつらむ山
 蔭かげみく。鹿かちつとさひ候あやまり。回まわりの行者ぎやうじやを射いて殺ころす。ぬき
 小膽こたんちら男おとこども。さるるに過あやまちつと慌あわてと。さるるに小敷こしきれた。
 既すでに律彰りつしやうてせんまふし。さるるのあをむらして見るは夏冬なつふゆの
 衣服いふくニツニツと。一冊いつさつの度牒どていありて。常陸ひいろのちよく國久慈郡くにじむ大門村かどむら枕石
 寺てらの新あたら發が意ん圓げん石せき俗ぞく姓しやうの同郡どうぐん同村どうむらの農民のうじん石濱いしはま要まち郎らうが交まじり
 助すけとあつ。抑おさ常陸ひいろのちよく國くに枕石せき寺てらの由來ゆらいを尋たづねる。小南こなん基きの僧そう弘こう道
 圓えんと号ごうと。えんは江州えいしゅう蒲生郡ふゆせいぐん日野ひの右みぎ大將だいしやう頼より秀ひで卿けいの苗裔なえぎは
 して。た傍たはらの尉ゑいと稱なづさ。故ゆゑあつて常とこ州しゅう久慈郡くにじむ大門村かどむらに住居
 せし。ある日。何なにが上人じやうじんとやえさる。聖僧せいそう來きたるとして一宿いつしやくとを
 のふを主人しゆじんとえて。兼かみ行ぎやうどつて上人じやうじんの門かど方かたなる石いしと枕まくらと
 して卧ふのふ。わけてその夜よあるの夢ゆめは老僧らうそう告つていつ。阿あ弥み陀だ
 如來にょらい今いま夜よ汝なんぢが門かど前まへに在ある。と。あどて款待かんとたいなうさる。といふ声こゑ
 小僧こそうとてえさる。公こう小怪せうがとつ。立たち出でてえれ。果は果はして入いる。傍たはら石
 小卧せうふとつ。その呼よ吸そく比ひ皆みな稱なづ名なは少せうえ。且かつ恐おそれ。且かつ款かんと迎むか
 入れて。厚あつく饗きやう食じき應おう。感かん懺ぜんのあをう。終つひ小上人せうじやうじんの第だい子しとあう
 つ。薙ち髮はつして道だう圓えんと法はう号ごうし。あのが宅ちやく地ぢをめて一箇いつくわん寺てらを

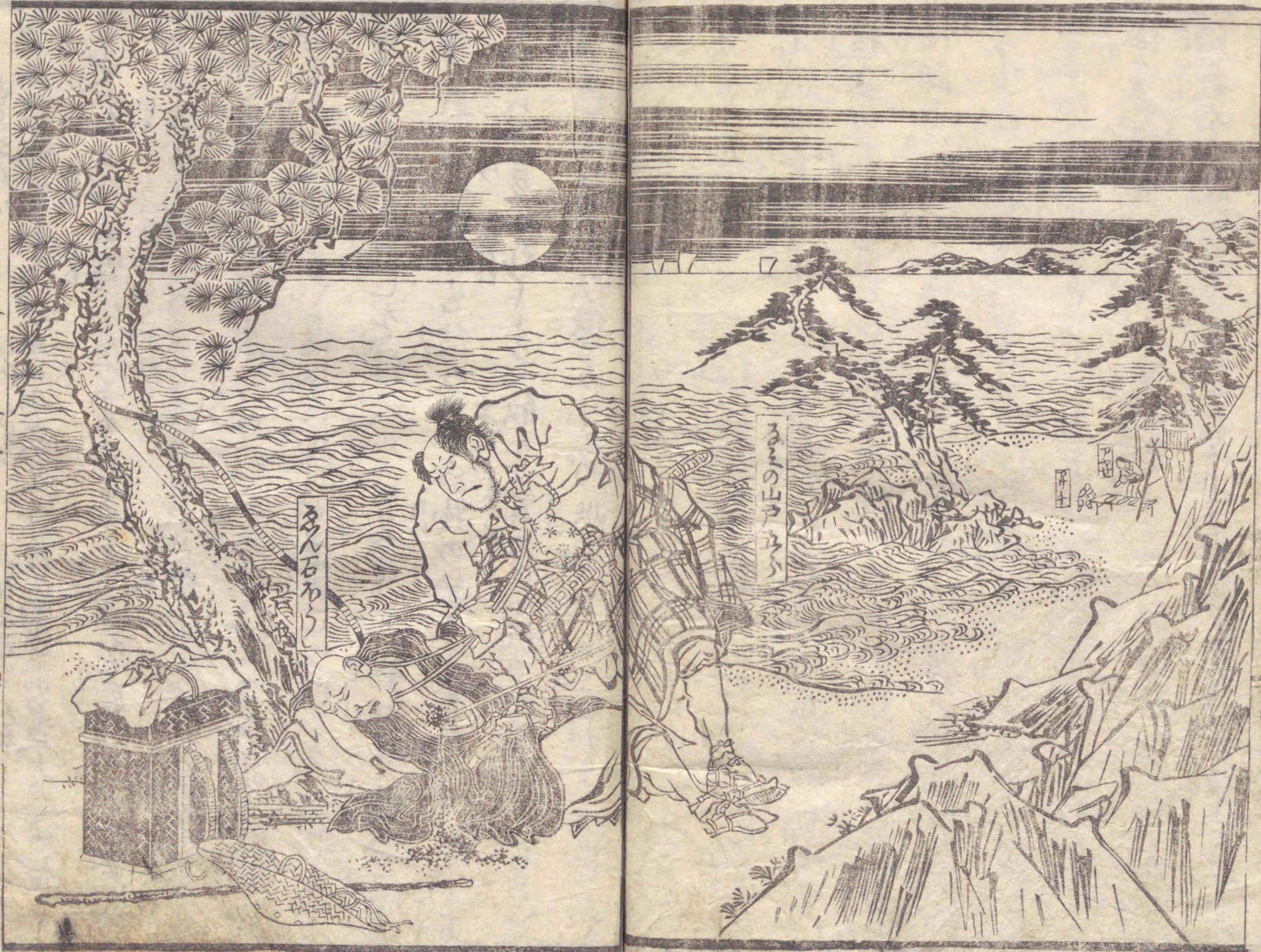
枕石夜話卷之上

建立と。今の枕石寺へまゐりて是なる
この寺中内田村は秘山
今又川井村はうづつとひ
らるる所なり
 らるるの人口小膽多して近國よりこれに信佛芸場の法師
 を殺しこれに戸五郎の一人を弟の誤を悔歎くべし。さあ
 してその人の腰のさうりをうの探りつゝ忽地慾心發り。さ
 かの路銀を奪ひとりて屍を濱辺よりて出して押流し
 そろそろぬ顔して居たり。さうも好まへ門をさる
 遙く悪莫千里と走ると速と道改なれば堆ひともなく
 と戸五郎の枕石寺の旅僧を殺して夥の金を奪とつゝ
 隣里の御黨ひひりて傳へりつゝ口順とせし殺し戸五郎

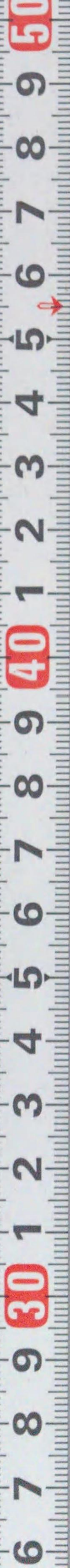
くれ少て驚え恐れいなくさ小塵くとあつぱふれりあじと
 思案し。俄頃女房俊依と女児お芽をおて。營園を逐電
 し。武藏國浅草小末で宮戸川原に住家と求め。さび
 獵師のあひをせむ。蛇ともりも人小勝れさる小彼圓石
 法師が路銀もさひの外あつとありしとめて。これを本錢
 として一艘の海船を造り。伊豆相摸へ赴いて物産を交易
 するを估業とす。ところのさびの浅草の邊より一圓の
 海船にて。緑波渺々る宮戸川原の影の獵師軒を並べ又
 海船をめて。世をこころめのもありしとせ。さる後戸五郎

枕石夜話卷之上

十二



枕石夜話卷之上

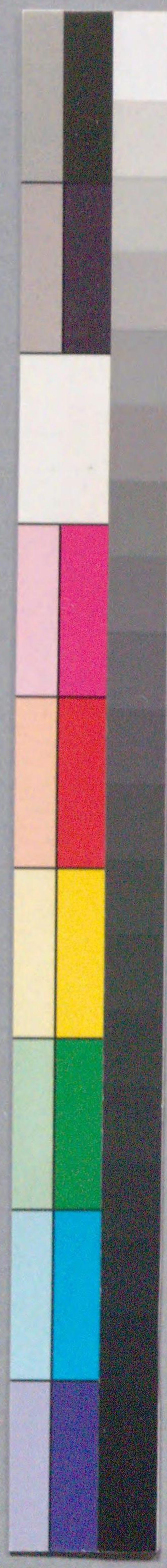


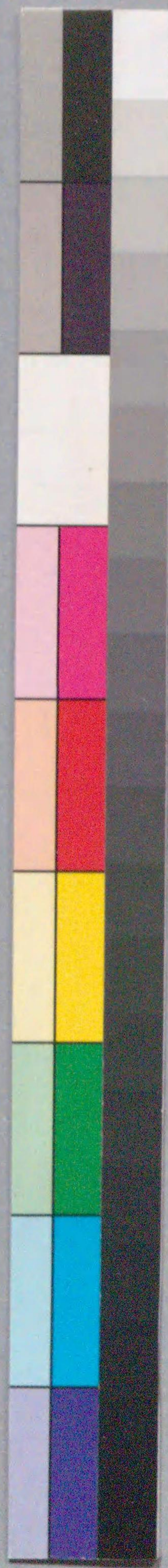
枕石夜話卷之二

と命拾つて罵あへば戸をうらやまう。凡決然と走る船
と笛のその聲力量がし。これらの年来りて度う渡海
されどもいづれか奇怪のあり。船の底は物とありぬ。
展檢よかりと人を入れり。揚らるる小果して船底はか
らるめのある。さかくして抜らうつめてあるを戸をうら
らうてつづける。小獸の角とわがりて。その長は二尺は
あり。肉毛の毛針のどく。取水牛の角は似て尖ることいふ
づものいふ。とららみの角さうん。とふ。けりの水中は遊
居るもの。とららみの角はさうらうけられ。忽地船底とつ

らぬ。とれがぬは抑留せられしみの取あられも順風は
時をゆて船のらう疾くしえ。その角おれ覆さう。小
まらび。只一の角お柱さう。從容とて走り船を留め
る怪力。はふべぬよのい。このみの尙怒て身を動かさば
侘作とらるめ。一人もあらず。嗚呼危うなる危うしを
嘆嘆とれば。耳を側て舌と吐驚さ。さういふらうらうら
このすか。くれらう。し。絶お彼此の老弱。少。僕。旦。らう。夕。ふ。は
る。ち。で。戸。五。多。が。門。は。群。集。して。彼。角。を。と。ん。と。精。め。の。火
小。後。る。も。あ。ら。う。と。戸。五。多。も。頻。は。是。を。賣。弄。して。高。運。の

枕石夜話卷之二



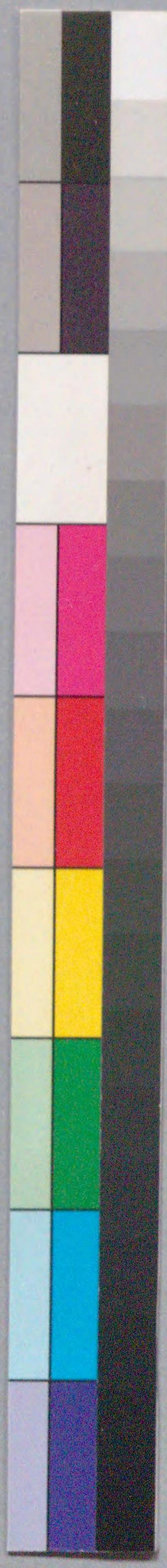
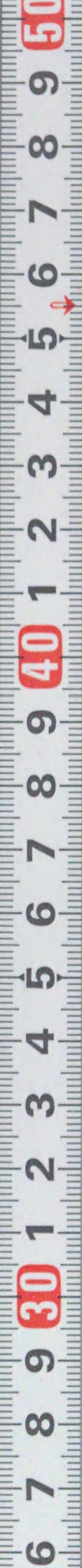


枕草子
夜言



むごを^{いふ}相^{あひ}携^ひ。價^{あひ}う^ひ買^ひ人もあ^あら^あず^あべ^あ。りつ^あろ^あ得^あ意^あ
 の人^あと^あづ^あね^ある。折^あし^あも^あら^あの^あ濱^あは^あ。一^あ人^あの^あ老^あ翁^ああ^あつ^あて^あ。こ^あま^あく^あ
 戸^あ五^あ多^あが^あ家^あは^あ杖^あを^あ曳^あ件^あの^あ角^あを^あ足^あて^あ。主^あ人^あは^あこ^あま^あか^あれ^ある^あ。
 愚^あ老^あの^あ口^あろ^あり^あし^あと^あれ^ああ^ある^あ博^あ士^あは^あゆ^ある^あと^ああ^ある^あ。凡^あ江^あ海^あ溺^あ死^あの^あ
 人^あ冤^あを^あ含^あむ^あと^あれ^あハ^あ魂^あ魄^あ化^あして^あ獸^あと^ある^あ。こ^あれ^あを^あ鬼^あ牛^あと^あい^あふ。
 その^あ形^あ尋^あ常^あの^あ牛^あら^あう^あ大^あき^あく^あて^あ。膺^あ力^あ又^あ水^あ牛^あは^あ百^あ倍^あ。常^あ小^あ水^あ
 中^あ小^あ沈^あ淪^あして^あ人^あは^あ足^あら^あう^あと^ああ^ある^あし^あ。ゆ^あこ^あれ^あを^あ足^あら^あう^あと^あれ^あハ^あそ
 の^あ人^あ立^あ地^あは^あ死^あさ^ある^あとい^あつ^あ。今^あ彼^あを^あ召^あひ^あ号^あを^あ足^あら^あう^あ小^ああ^あら^あ
 全^あく^あ鬼^あ牛^あの^あ角^ああ^ある^あべ^あし^あ。こ^あや^あ舊^あの^あ海^あ底^あは^あ返^あさ^ある^あと^あ却^あて^あ利^あ
 を^あ射^あんと^あ計^あ較^あめ^あつ^あ遠^あら^あざ^あして^あ崇^ああ^あら^あん^あと^あか^あく^あ海^あは^あ投^あく。
 その^あ舊^あ小^あ返^あ一^あの^あ人^あと^あて^あいと^あ町^あ寧^あは^あ諫^ある^あ小^あ戸^あ五^あ多^あ又^あ小^あ信^あ
 用^あさ^あぎ^あこ^あこ^あれ^あを^あ預^あて^あか^あ愛^あめ^あれ^あを^あ捨^あさ^あせ^あ空^あ糶^あは^あ拾^あひと^あ
 こ^あま^あか^あれ^あが^あ利^あを^あさ^あら^あめ^あの^あこ^あま^あひ^あし^あ却^あ老^あ翁^あを^あ恨^あめ^あ
 こ^あん^あぐ^あは^あ罵^あう^あて^あ。その^あ後^あハ^あ考^あせ^あも^あつ^あけ^あど^あ。あ^あら^あう^あ小^あの^あ濱^あの^あ
 南^あは^あ當^あて^あ。こ^あま^あら^ある^あ嶋^ああ^あら^あ。その^あら^あう^あ夜^あな^あく^あ彼^あ知^あは^あ
 牛^あの^あ吼^あ声^あして^あけ^あり^あ。え^あま^あ人^あも^あ信^あじ^あど^あ。牛^あ馬^あ六^あ畜^あを^あ養^あふ^あ
 知^あふ^あも^ああ^あら^あぬ^あ。牛^あの^あ鳴^あと^あ怪^あし^あれ^あバ^あ天^あの^あ明^あと^あを^あ俟^あつ^あ備^あ
 人^あ小^あ船^あを^あ使^あて^あゆ^あめ^あて^あん^あら^あふ^あ。こ^あま^あて^あ物^あも^あな^あし^あ縁^あ故^あい^あ

枕石夜話 卷之二



いよ不審とて。戸毎にふくかかれ慎る。夜廻りありのま
 りつらふ。十日ぐらうを待て。牛の鳴と止ぬ時ふ建長三
 年三月六日。戸五郎が妻後徹の金龍山の花をよると
 て。今茲十二才よりりる。女児浅茅をおも。浅茅寺小
 坊ぞづ観世音を誦して。やぐく本堂の後なる食堂の
 わらりぞぐ到るおしもあれ。俄頃海鳴り風吹お云。
 その容牛のどれめの忽然として走り来つ。直は角をぬく
 凌波が胸ころをつつねた。それを項よりう被つ。浅茅小
 毒氣を数回吹りけ。只一跳は食堂に突て入る。ふあは
 集會の法師なる。教員に怖れと昏絶し。矢庭に死せる。りれ七人。
 疾病と愛く久く起ざるの。廿四人はぬべと。抄りく終程千

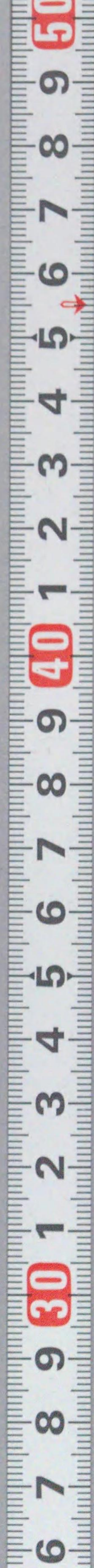
境内の衆人。囂塵とて毒ま。五郎が家不縁由を告末
 ま。戸め即慌忙と。鴨八ともみその処へ走りゆ。彼牛鬼々。
 竹地ゆえん迹もろく。凌波が屍をええ。只女児朝茅の。仰
 きぬは倒れとありし。抱き起してささくも。ゆれど頓ふ。作
 り。牛の涎練くともぼし。きりの。顔ふ吹く。ゆれと。推
 る。家不むれ。帰る。薬竹とこの。まをく。と。端
 うひありて。その日れ。ふ。朝茅。やう。やう。魅生。ま。う。

枕石夜話



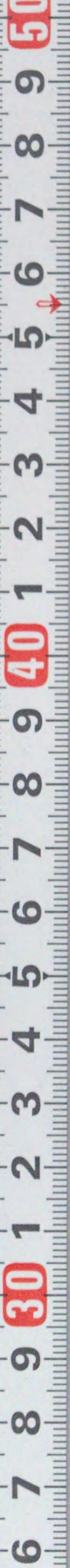


屍を索んもく浦人瓜相詰水陸ともおちもろく探求する不
次の日よ到りまき向ひする入仁不浮出くれはとと船不引揚本
きりて野道おろり取の如く嘗てより綾原ゆく非余も死し
朝芽又々々々病もあつたり果されハ彼おけこ是よりつらあつ
ハ形もこの本のまきばささぐ不修業もろく海まきまきとて
引籠てありり於不録倉人物産と積送る日子も定あること
されハ今度の甥の鴨八とまがかりハ船改させと彼地へ外
まきまきりまきまき時ハ違ふまきまきとて音はまきまき
あまらふまきまきとて人瓜遣して其の居伴と探問とらふそれ
入立るまきまき甥子と録倉あつて縣の錢を遺ひとれと贖へハ
せんまきまきやまきまき水主龍取あつてまきまきとて私擔ハまきまき
船まきまき法却して逐電まきまきと告ふまきまきハ戸五郎関て果
且怒り且罵まきまきと今ハ世渡る穢とらまきまき別お施まきまき
謀多く僅半年あまきまき身止衰微して朝お煙絶く夕乃報
まきまきつる預ふまきまきやまきまき先翁がひひハ中瓜也ひ當り彼角を
まきまき捨んまきまきまき箱の蓋と開くまきまき角ハうせてゆく処とまきまき
まきまき又一の不思議まきまき加梅お母怪まきまきと日より浅芽が病著
まきまきつてまきまき持ハ生平まきまきとてまきまき見ゆまきまきとて腕のまきまきあつてまきまき



オナ言

ありてその容結胎めく如く。あつれどもつらみ十二才の女が
 懐胎と云ふやういふに、是の牛鬼の涎沫彼が咽喉ふひりしより。
 病をまふとてとまど推量てゆめも厭りて、医療さむとてふと
 用とてども露をうりも験なく日みくみ腹の大きやふたりしとて
 醫師も全く懐妊と云ふとて十月の多り死に逢ふ。胎も
 子頻に動き今も産ま出べき氣多ければ親も疎まむと今未
 曾有の椿夏なりとて只この車のくは口順とてまふ縁故とて
 志もつらむ。おのりおのりさもつらむ。彼戸五郎の故郷ゆく回國の行者
 と移り。鞍の路銀と奪ひとりて屍と海へ衝流しとの浦に脱
 ちて。弘長とてつらむ。よるに幸残るゆめのみ死んで久しく
 深也へき曩小伊豆の海ゆく弘底とほくぬきたる。獸の角も老翁
 がりしとて。彼行者が冤魂化して鬼牛と有りて仇を執んと
 する。小戸五郎が命運いも。竭せんべい必死と脱とてり。多を被
 曉ゆるごとく。却その角と賣弄し。よるに價は賣らん。弘底を
 へ。忽地とて。かた女房綾瀬と殺され。今又女兒浅茅。奇
 病を受く。因果靚面の道理を示すゆめのみ。致おとすべし。く
 密語ぬ。宣ふ。残忍狼房なる。戸五郎も。この風声とめれ。聞よ
 と。ね牛特々とて。當る事の。つらむ。れ。猛みゆめのみ。あを。つらむ。く

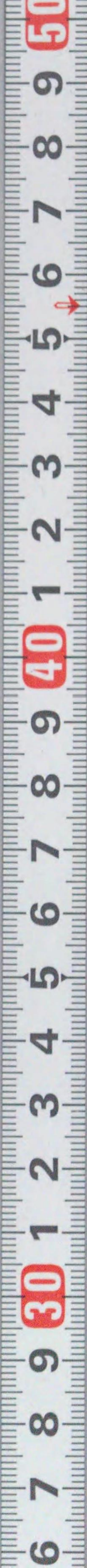
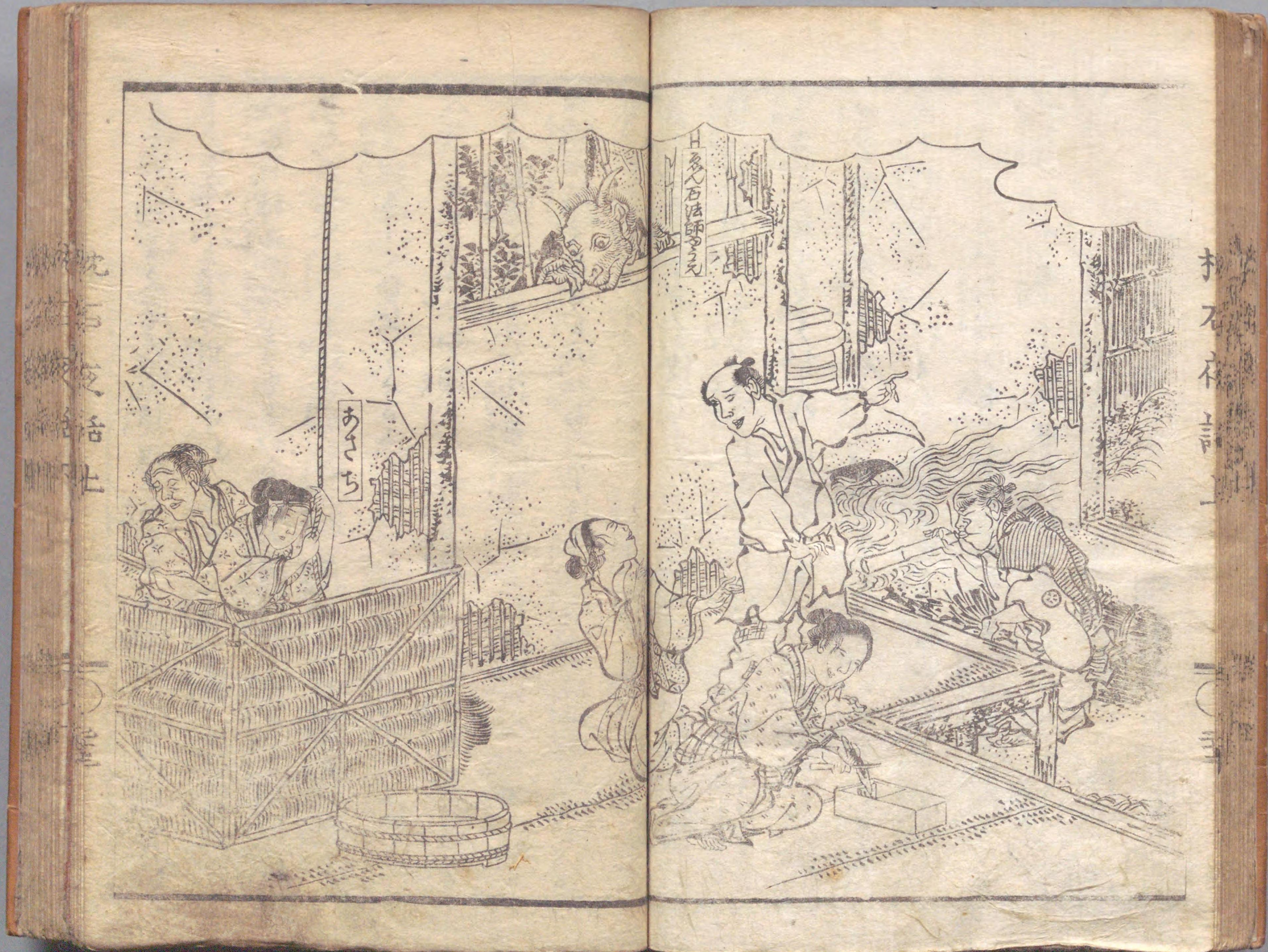


吼々^{こゝろ}処々^{ところ}とらとら牛嶋^{うしじま}と号^{なづ}とり。きくくバ綾^{あや}織^をが屍^{しかばね}の
浮^うき入^い紅^{べに}を後^{のち}世^よ綾^{あや}瀬^せ川^{がわ}と稱^{なづ}る放^{はな}好^{この}者^{もの}看^{けん}信^{しん}後^{のち}
勘^{かん}あぶ

③一ツ家の少女五箇年懷妊附野寺長者石枕の縁故

憂^{うれ}苦^くの中^{なか}みある人^{ひと}の凡^{おほ}伸^{のび}髪^{かみ}を拵^{しら}へおぼえぬ戸^と五^ご郎^{らう}が
女^{むすめ}兒^ご淺^あ茅^{かや}ハ既^{すで}ニ八^{はち}の春^{はる}とらへ顔^{かほ}色^{いろ}も又^{また}人^{ひと}多^{おほ}くされば
奇^{あま}病^{やま}ふもそとと妻^{つま}みえんとりりものもまろ親^{おや}そのほとり
まゝ家^{いへ}を夜^よ毎^{まい}小^こ魔^まましく伏^ふく露^{つゆ}ととを得^えねば一人^{ひとり}
精^{せい}室^{しつ}二人^{ふたり}居^いと授^まけし後^{のち}は淺^あ茅^{かや}が行^なる家^{いへ}の縁^{えん}故^こ

く誰^{たれ}れいともまろ淺^あ草^{くさ}の一^{ひと}ツ家^やと呼^よせり。わけて朝^あ芽^めハ
懷^こ妊^{にん}五^ご箇^ご年^{ねん}ふ及び^{およ}び今^{いま}茲^{こゝ}三月^{さんげつ}六^{ろく}日^{にち}の夜^よ安^{あん}産^{さん}し女子^{こね}と
出^い産^{さん}も豫^よてまこれし人もりうろろ鬼^{おに}子^こと産^うまきまろまろひつ
ふまゝくくしと。うまれ一^{ひと}児^こハ玉^{たま}のまろ忽^{たち}地^ぢちまろみりて。一
月^{つき}が程^{ほど}よく歩^あ行^りよくのりひく尋^{もと}常^{じょう}四^よ五^ご支^しの依^よる異^い
まらばらと狐^{きつね}弱^{じやく}方^{ほう}と多^{おほ}くけて母^{はは}の寵^{ちゆう}愛^{あい}比^ひるりまろまろ。小
朝^あ芽^めハ子^こと奉^{ほう}くより。まらば猛^{まう}くまろて。替^か力^{りき}と丈^{ぢやう}夫^ふとこ
入^いも四^よ人^{にん}も雨^{あめ}をまろんがまろまろ。貪^{おん}まろも飽^あこまろ。
あられゆく子^こと。駒^{こま}方^{ほう}と富^{とみ}る家^{いへ}の婦^{つま}もまろまろ。ちん



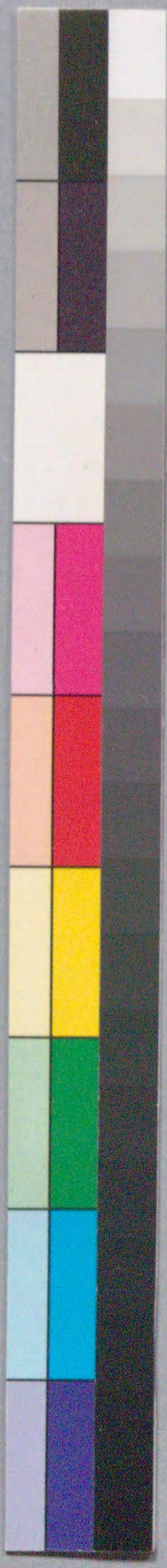
人の誅罰と云ふ事。道理も教へても。只かのはぬ利。と云ふ
す。と云ふ。ちよめ憐れ。人ものしく憎てまう。と云ふ。よつ
後。弟ハ。浦曲の縁と云ふ。と云ふ。廣澤村の農家。と云ふ。備
ま。日。く。彼。処。に。到。り。田。を。新。敷。と。挽。僅。う。賃。銭。と。親。子
か。今。細。り。て。世。に。か。つ。る。ふ。それ。も。女。兒。弱。方。が。絆。と。り。と。
人。の。い。ふ。よ。う。せ。び。頃。し。も。神。子。の。乃。上。旬。養。輪。より。なる
と。く。弱。方。と。脊。負。ひ。浅。草。寺。の。北。方。に。田。畠。を。過。り。弱。方
が。頻。に。位。く。己。が。ま。は。ら。う。は。道。次。の。株。と。尻。と。う。け。く。
志。か。乳。汁。を。飲。ま。れ。ば。日。も。早。向。暮。と。す。ら。一。つ。家。乃

長者。が。石。の。枕。と。り。り。の。あり。て。形。ハ。常。の。枕。ハ。異。な。り。秘。と。
その。石。光。澤。あり。て。玉。の。如。し。り。られ。と。取。り。歸。る。の。の。目。目。
その。人。心。崇。と。う。け。く。程。も。ま。く。家。破。且。子。孫。断。絶。と
と。く。今。の。と。世。と。取。り。ん。と。す。る。の。の。も。ま。れ。ど。ま。は。縁。人
ま。ん。ど。縁。故。と。考。へ。て。さ。ら。に。ま。ま。と。し。あ。の。い。づ。も。禍。よ。り。ん
ん。く。と。あ。の。い。ち。ち。り。里。人。ホ。礼。と。その。何。より。は。建。く。縁。由。と
去。写。お。ま。ね。抑。む。う。一。の。処。ハ。野。寺。に。長。者。と。く。り。て。富。人。の。り
り。尤。餘。町。ハ。屋。補。と。構。て。他。人。の。軒。と。ま。ま。へ。ど。故。時。の。人。は。頻。て。
一。つ。家。の。長。者。と。も。又。枕。の。長。者。と。も。り。て。件。の。長。者。夏。日。の。炎

枕石夜話 二

し。いかに欲とちひわれの。さ。取。つ。ま。の。惜。ま。か
 らも。これ。も。命。の。惜。ま。の。と。ち。い。え。り。て。き。り。退。ん。と。せ。し。が。
 又。ち。や。う。暗。夜。ふ。も。の。疑。い。目。小。鬼。と。ん。と。ど。り。ま。る。人。此。
 枕。と。取。と。ば。崇。の。り。と。岡。怕。ま。る。が。故。に。わ。ら。ふ。り。と。崇。ま。し。め。り。
 され。と。徒。と。り。て。崇。あ。る。も。崇。ま。る。も。す。べ。く。ま。ら。ふ。あり。怕。ま。し。め。
 足。と。ど。と。い。ち。ち。や。を。り。路。方。と。抱。お。後。し。く。ま。り。指。指。と。り。
 あり。つ。石。枕。の。真。中。と。指。り。り。と。軽。ら。う。ふ。引。提。ま。逐。ふ。路。方。が。
 手。と。引。く。な。ま。ん。と。も。折。し。も。忽。地。指。む。の。蔭。より。一。人。乃。
 食。ま。り。せ。く。淺。草。が。帯。の。と。り。火。焚。と。引。と。り。の。婦。ま。り。て。かく。
 勝。の。ち。ま。り。と。し。濟。より。こ。み。あり。て。火。が。盜。ま。る。と。よ。く。ん。ん。途。
 くれ。ふ。その。所。得。と。し。け。銭。の。ぶ。ち。や。く。よ。う。い。い。く。その。
 蔽。衣。し。と。脱。せん。と。く。り。ま。ま。り。の。く。罵。れ。ば。あ。さ。ち。た。ふ。怒。り。て。
 枕。と。指。く。と。崇。の。も。り。火。子。食。左。手。と。も。と。り。て。丁。と。ち。
 排。ふ。と。乞。食。へ。あ。は。透。間。も。う。く。打。く。わ。ら。へ。囚。ま。と。る。潜。り。つ。
 臂。の。の。り。を。握。首。隈。の。こ。夕。月。の。影。み。た。と。め。く。顔。と。見。あ。り。
 す。ふ。ふ。の。乞。食。へ。五。箇。年。已。前。は。逐。電。し。て。後。身。隠。ハ。ま。り。
 の。り。く。送。み。ら。し。り。と。驚。ま。り。と。擲。り。り。養。も。和。ま。り。
 て。左。右。ふ。引。退。こ。て。朝。芽。ま。り。彼。が。く。み。あ。る。故。と。同。バ。暗。ハ。登。り。

し。いかに欲とちひわれの。さ。取。つ。ま。の。惜。ま。か
 らも。これ。も。命。の。惜。ま。の。と。ち。い。え。り。て。き。り。退。ん。と。せ。し。が。
 又。ち。や。う。暗。夜。ふ。も。の。疑。い。目。小。鬼。と。ん。と。ど。り。ま。る。人。此。
 枕。と。取。と。ば。崇。の。り。と。岡。怕。ま。る。が。故。に。わ。ら。ふ。り。と。崇。ま。し。め。り。
 され。と。徒。と。り。て。崇。あ。る。も。崇。ま。る。も。す。べ。く。ま。ら。ふ。あり。怕。ま。し。め。
 足。と。ど。と。い。ち。ち。や。を。り。路。方。と。抱。お。後。し。く。ま。り。指。指。と。り。
 あり。つ。石。枕。の。真。中。と。指。り。り。と。軽。ら。う。ふ。引。提。ま。逐。ふ。路。方。が。
 手。と。引。く。な。ま。ん。と。も。折。し。も。忽。地。指。む。の。蔭。より。一。人。乃。
 食。ま。り。せ。く。淺。草。が。帯。の。と。り。火。焚。と。引。と。り。の。婦。ま。り。て。かく。
 勝。の。ち。ま。り。と。し。濟。より。こ。み。あり。て。火。が。盜。ま。る。と。よ。く。ん。ん。途。
 くれ。ふ。その。所。得。と。し。け。銭。の。ぶ。ち。や。く。よ。う。い。い。く。その。
 蔽。衣。し。と。脱。せん。と。く。り。ま。ま。り。の。く。罵。れ。ば。あ。さ。ち。た。ふ。怒。り。て。
 枕。と。指。く。と。崇。の。も。り。火。子。食。左。手。と。も。と。り。て。丁。と。ち。
 排。ふ。と。乞。食。へ。あ。は。透。間。も。う。く。打。く。わ。ら。へ。囚。ま。と。る。潜。り。つ。
 臂。の。の。り。を。握。首。隈。の。こ。夕。月。の。影。み。た。と。め。く。顔。と。見。あ。り。
 す。ふ。ふ。の。乞。食。へ。五。箇。年。已。前。は。逐。電。し。て。後。身。隠。ハ。ま。り。
 の。り。く。送。み。ら。し。り。と。驚。ま。り。と。擲。り。り。養。も。和。ま。り。
 て。左。右。ふ。引。退。こ。て。朝。芽。ま。り。彼。が。く。み。あ。る。故。と。同。バ。暗。ハ。登。り。





枕石夜話

枕石夜話上

くさや

あさぢ

むすめ

若公見ん



おしん不言

とい後房のしりぞその飢渴と救ざるべき夫抱うさ船のゆるぎやう
 ざる馬ハまどどこれ小舟眉べき夫多く身むとらあして幼稚さ
 ののと養育バ能うさ船をさぐる馬おとしく身もが又乃高
 恩とありひ又過のたある孤悔ひ今よりして粉骨と想しこれと女児
 と養ひわぐこれ又保身と夫と舟眉てゆめは富とをうさ
 の事うけ引り入あうとりバ鴨八大と教びて一談も及ぶとい
 すが庚幾ところ之衆老ゆく後まぐも誑く言葉ハ致りと誓
 ひつらちほとどちて一ッ家おぼすその夜妹脊の締とまうつ久
 後ハいごあつべり睦くくをいあつたさうねぐる人ふ朝芽が
 邪智うつまが憎むるふ今又鴨八が立攻アア夫夫婦とるりねと
 聞くと虎は翼とそえり彼ホニ入うらうらぶりうら悪本
 を計較えんといよく疎くまきく怕まき路ふゆさめの時ハ
 これを避くものいんささふとら鴨八が腕の痛全く愈て彼此
 をまうまわれとも海船漁獵の縁あへええ備ふ入うらうら
 されバとも本錢もあつた別は多とべき估業もあつた熱一人の
 口のく強く鴨八が及て来ざる以前あつたあつた夫夫婦
 相語て彼石の枕と賣らんとする小縁故とあつた入あつた買へる
 もあつたよやあつた入ありとも虚しく賣弄して偷來する

枕石夜話

二七

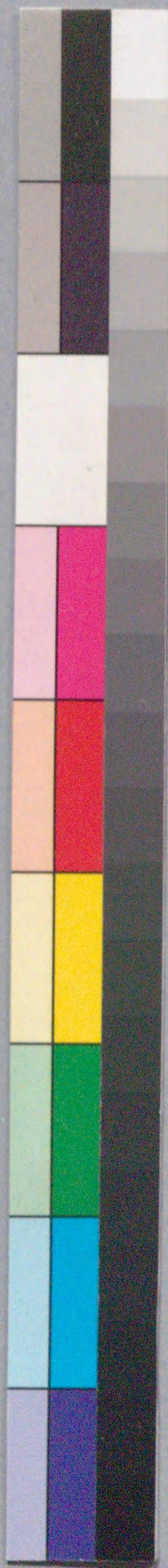
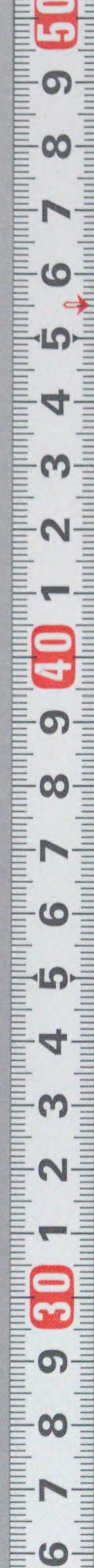


208
2
163

敵討枕石夜話卷之上終

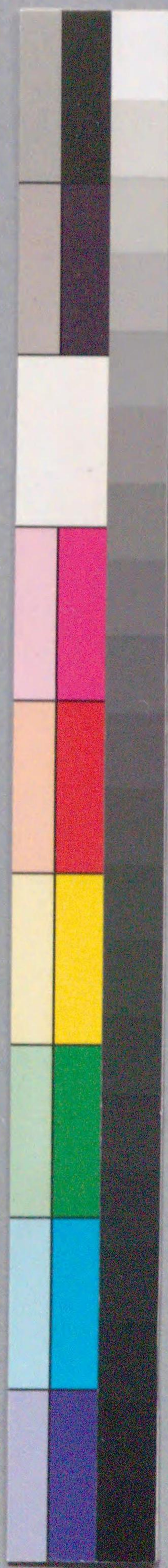
車あつせ渡あつせ受うけまま毛けと次よき疵きずと赤あかるあくくととひひももちちひひもも又また頭あたま
みめ物ものの用もちおおききくくばばとせんせんかかくくせんせんとと頭あたまと病やま顔かほとつつふふああじ
けけくく智ち恵えととふふ智ち恵えととふふへへどどもも轆ろ魚ぎよの泥どろみみ吻くちくくどどくく内うちおおきき
施ほふふ謀まうくく外ほかみみ秘ひふふべきべき人ひとももううららううらられれととぞぞ。

枕石夜話



觀音利生
孤館記傳
曲亭主人著
一柳齋画
敵討枕石夜話
卷之下 慶賀堂梓

208
2
163



観音くわんおん 孤館こくわん 記傳きでん 敵討枕石夜話卷之下

曲亭馬琴纂補

③ 圓通菩薩えんつうぼさつ 一ひと 朝芽あさぎ を懲こ ぐ

浅草あささ 今戸いまと の紀原おきもと

その朝芽あさぎ 尋思まねん 志こころ たる。あまのけしや一枚の水みづ。

十人じゅうにん け湯かみゆ とを ぬがごとく半盞はんざん の油あぶら の長夜ながや 冥みやう まで足あし づき。い

夫婦ふうふ 萬まん 苦く 辛しん とく様さま も。さやる奉儀ほうぎ までさ小進こしん 迄まで 僅わずか かる

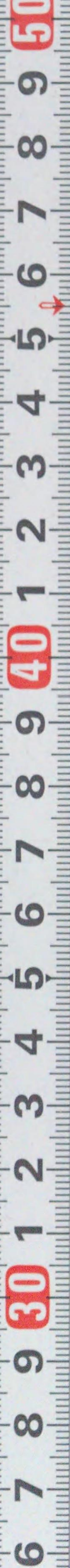
浅あさ とゆき。のの腹はら 小満こまん するもの久ひさ さらん日ひ 牙は 衰し 論ろん へうへい して。隠ひそ へ

夜話





6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50



枕石夜話

ちりり礮と打ば法師ハ一声阿呀と叫び。泥の中へ倒れ
 と。起しもさぐど打ばとふ窓地息しえり。さるる死さる
 みるるこころ。懸く引起さるる又法師あり。さるる死さる
 女児弱形が漬渾まり死し。死るる死るる驚る。朝
 芽のうらも。さるる小勲る。縛るる縛るる救うもあ。彼
 と是とふ似もつらぬめと。かくあや死夜よ。足あやさるる
 らそ不審なれ殊法師ハ迹る失る目今捨る傘もほ。
 彼ハ原來孤あり。ありん。さるる竹とせん。周章大々
 朝芽のうらも。朝芽のうらも。鴨ハさるる。且弱形が横死と悲
 一。さるるおるるのやと。雄のあはるる子の亡骸とる抱き。
 唯心と長中あり。通門の水と掬る。さるる死入とるさるる
 小草の上物あり。何ぞと。さるる死とる。疊糸奸賊鴨ハ朝
 芽小場。枯樹春小回。大悲の灵茶と写し。死る。且怪く且歎び。打
 閑さるる。香氣顔郁る。九茶十粒なりあり。さるるさるる
 四粒鬘碑。飲るる飲るる。駒形立地不甦生る。氣力生平異る
 る。さるる。彼法師ハ九人あり。さるる。観世音の現化とる
 懲ら。さるる。何と。毛骨のさるる。悪刹刻剥
 の兇賊も。俄頃物のおさるる。互に顔さるる。死る。

枕石夜話



枕石夜話

枕石夜話



6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50

枕石夜話

その夜の駒形が恙なきに幸ありきなりしが。その後夫婦は旦
く悪念を起さず。去年より掠りたる孩もあれはそれと
奉養とて活業とせんと裁さるるに。このころは鎌倉より陸奥へ
引くよ上下の流谷より。國府方千騎谷と歴く山中村より
富塚村の津と渡り。難目谷より。澁川村より。二條
の川あり。これとて井渡り。西原平塚田畑石濱須田村柳
島へ。又次田の辺る二の小川と大河を渡り。又芝碕
湯島を歴く浅草へ。捷徑あり。とぞ。古老の申傳ふる
旅客されと便り。多し。ふれ。は。旅店を開き。し
り。夫婦。遂に背門の。中。を
建。え。木賃宿。と。旅人と援ね。え。う。ハ
一。家。外。宿。も。奥。下。の。人。の。多。く。諸。國
の。道。者。浅。草。の。觀。世。音。へ。詣。る。便。り。と。夜。毎。よ。家。の
歌。の。多。し。鴨。ハ。家。の。北。の。分。り。里
の。其。取。亭。中。後。を。建。る。み。大。灯。を。前。の。風。景
の。好。し。今。の。戸。五。郎。亭。と。よ。と。入。る。人。の。多。く
の。貸。中。と。び。び。る。み。えん

枕石夜話

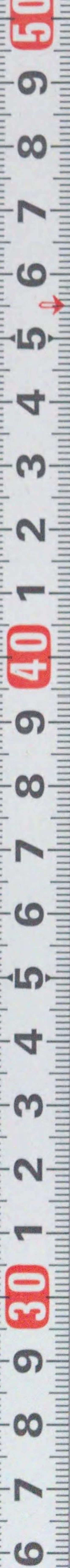
6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50

四 圓通菩薩ゆび朝芽を懲らま

附 駒形の渡り

又五七年の春秋を送る。朝芽ハ舊病ふび發り
動とれバ定の外なる。旅終後と貪う。剝物めくる旅客と
えとバ。まご夜ふつこふ曉方ありと傍りこ出ま。途ハ鴨
ハと待伏さく。その路銀と奪ひとる。さめれどけ
たうれ。一ツ家まじ。後くこれとる。ものば。忘るふ駒形
ハ。そのまご親ふ似ど。稟性恰利。めめ。憐とらう。さ
年十むのころ。布と織と。火くして。年開る
か。みも劣ら。ど。又母の非美。非道と。かくさ。ぐと。ち。さ。め。れ。ど。
その行ひと。さ。小。傍。痛。さ。す。の。ま。れ。ば。さ。く。と。れ。と。諫。ふ。
又。母。も。更。も。用。る。氣。色。さ。ら。ん。ば。よう。歎。え。竹。か。れ。若。根。を
植。く。又。母。の。罪。業。を。贖。ん。と。さ。ひ。う。が。母。も。さ。り。せ。ど。一。く。
織。る。布。の。價。と。半。ハ。入。ふ。あ。け。と。二。三。年。を。経。る。程。よ。その。錢
中。五。六。十。貫。も。及。ぶ。り。さ。く。と。れ。と。め。く。濡。み。船。と。造。り。し。が。住。む
同。く。さ。り。の。西。さ。り。釘。の。施。行。の。渡。舟。と。り。立。高。牛。嶋
の。と。く。ゆ。く。の。め。為。ふ。便。く。く。さ。り。さ。り。里。人。ホ。た。ま。款。で。その
功。徳。と。稱。讚。し。駒。形。の。渡。り。を。嘆。び。あ。ら。た。え。り。駒。形。ハ

枕石夜話下



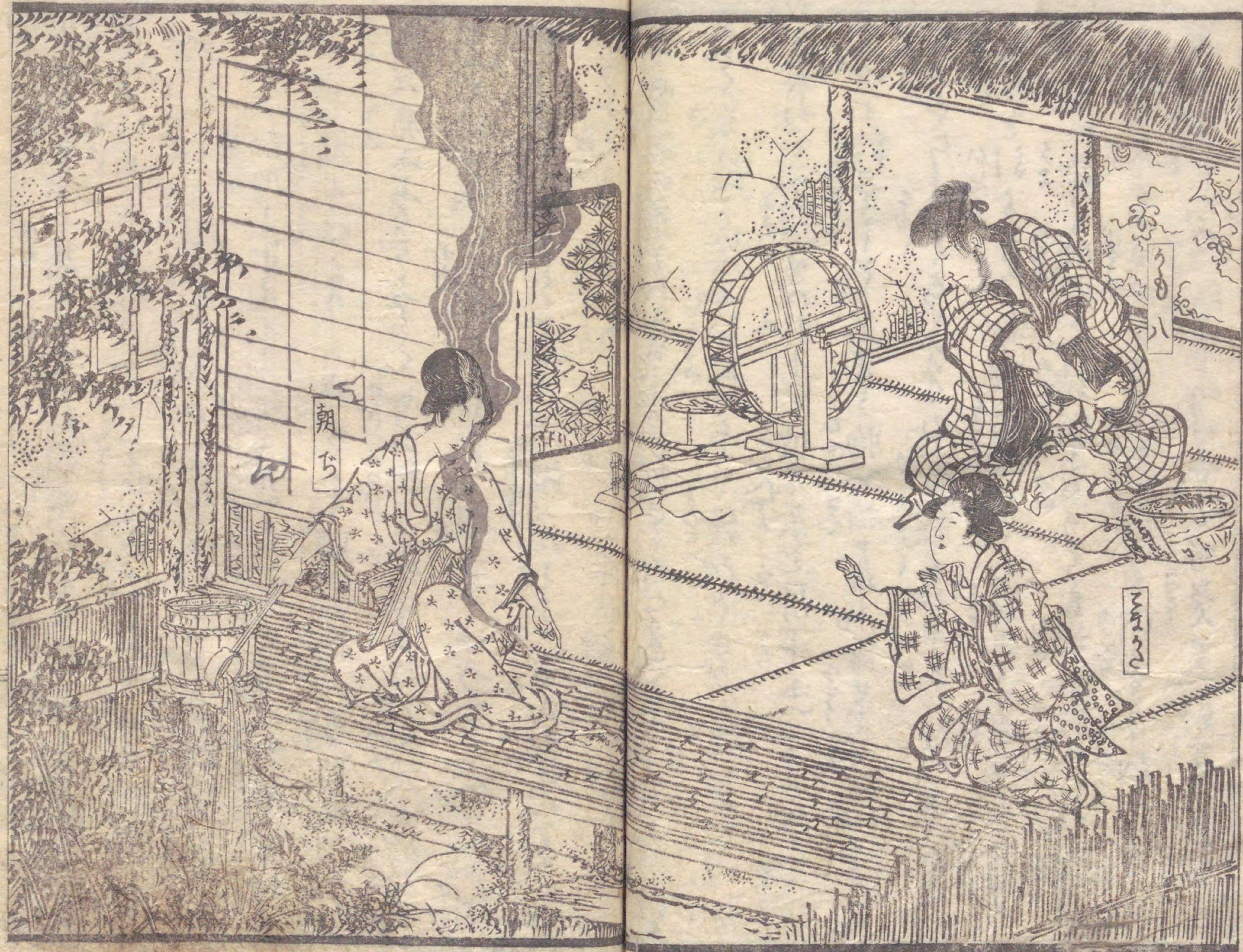
木石存言

又母ふこのふとあぶせざれば鴨ハハひもさう朝芽と女
 児が織る布ふあへくハ残とゆるみのとけうごと不審
 同羅るるちぐくまねど駒形ハあをうも親と恨む
 只このあへたをと博さ信の道ふ尋てあへくあへた
 中へるふ浅草寺の観世音と祈るの外又他るうりたり
 朝芽ハられと聴も入とぞそれ生とく北餘年一日も病
 定と兩度の食外物食でもあへく況と目あもええぬ
 腹の中と醫師が木の皮草の根汁をのこ洗ふともさ
 推量の汝法ありと邂逅病の愈るもあれどそれハ偶中
 多り世に醫師の是ふとつひとつと錢母ど惜さめのはじ
 見えよ聖ハ愈らんといふよ弱形も煉くも忍止一う次の日ハ
 至りてんいふ記ゆるまあうりたりんハ駒形又母よりや
 うや醫師の薬を用ひぬらむとも貯りよ菜あへバ進
 とぶうとひたりと彼此とる探うて付るふゆりる骨柳
 の底ふこの丸菜乃とぶすしとハ何の症ハ用ひり功あるうハ

定と兩度の食外物食でもあへく況と目あもええぬ
 腹の中と醫師が木の皮草の根汁をのこ洗ふともさ
 推量の汝法ありと邂逅病の愈るもあれどそれハ偶中
 多り世に醫師の是ふとつひとつと錢母ど惜さめのはじ
 見えよ聖ハ愈らんといふよ弱形も煉くも忍止一う次の日ハ
 至りてんいふ記ゆるまあうりたりんハ駒形又母よりや
 うや醫師の薬を用ひぬらむとも貯りよ菜あへバ進
 とぶうとひたりと彼此とる探うて付るふゆりる骨柳
 の底ふこの丸菜乃とぶすしとハ何の症ハ用ひり功あるうハ

虎石交舌下

十



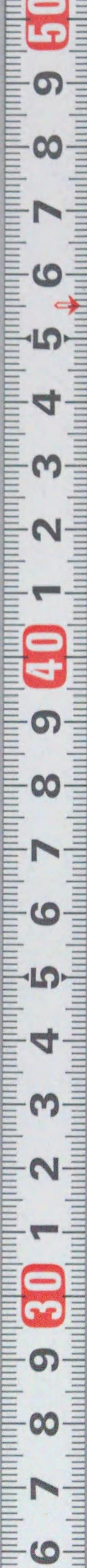
6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 6 7 8 9 50

枕石夜話

嗜^し色^{しき}と好^{この}山の外^{のう}志^しづ^くるもあ^らば志^しづ^くるもあ^らば
 亦^いく面^{おも}影^{かげ}もろ^ろり^りれ^れが彼^{かれ}う^うろ^ろど異^い妻^{さい}と引^ひ入^いん^んう^うと
 日^ひ来^きぬ^ぬく^くち^ちひ^ひつ^つる^るふ^ふ俄^か頃^んに^に起^お居^ゐる^るも自^じ在^ざな^なら^らず^ずも^もろ^ろり^りね^ねれ^れが
 と^とも^もろ^ろり^りと^と安^{やす}と^とる^る日^ひも^もあ^ある^るれ^れ只^{ただ}ち^ち持^もて^てあ^あら^らす^すは^は牙
 か^か又^{また}と^と呼^よぶ^ぶ入^いち^ち天^{てん}地^ちの^の間^まに^に絶^たえ^えく^くる^るま^まの^のと^と回^りく^くば^ば駒^{こま}形^{かた}の
 ま^まと^とく^く呆^めれ^れく^くふ^ふて^てび^びり^り入^いて^て火^ひの^のど^どの^の朝^{あさ}芽^めの^の夜^よ毎^{まい}
 角^{かく}の^の料^{りょう}あ^あら^らず^ず水^{みづ}菜^なと^と大^{だい}き^きな^なら^らず^ず痛^{いた}み^み漬^{づけ}り^りと^と重^{おも}
 げ^げる^る石^{いし}瓦^わ壓^{おさ}す^すて^て厄^{やく}留^{りゅう}の^の隅^{ぐも}に^にあ^あら^らす^す鴨^鴨ハ^ハが^が夜^よの^の唇^{くちびる}を
 う^うち^ち臥^ふて^てあ^ある^るを^をい^いせ^せく^くと^とい^いひ^ひや^やあ^あら^らす^す旅^{りょ}客^{かく}を^を留^{とど}め^める^るふ
 妨^{さまた}ぐ^ぐ。彼^{かれ}漬^{づけ}桶^{づく}の^のほ^ほろ^ろり^りふ^ふ臥^ふさ^さす^すう^う鴨^鴨ハ^ハ半^{はん}足^{そく}こ^こえ
 動^{うご}く^くが^があ^あら^らず^ず氣^きを^を屈^かむ^むと^と彼^{かれ}と^と争^あむ^む日^ひあ^あら^らず^ず改^か痛^{いた}て
 堪^たえ^えら^らず^ずじ^じり^りに^に密^{ひそ}に^に形^{かた}あ^あら^らす^すう^うち^ち臥^ふさ^さす^す
 也^やも^も改^か熱^{ねつ}く^くて^て苦^{くる}。如^{ごと}此^この^の指^さに^にあ^あら^らす^す石^{いし}枕^{まくら}あり
 夏^{なつ}の^の日^ひの^の枕^{まくら}と^と睡^ねむ^む涼^{すず}風^{かぜ}耳^{みみ}の^の根^ねに^にあ^あら^らす^す叶^か奴^ぬ
 ち^ちも^も勝^かた^たな^なら^らず^ず又^{また}暖^{あたた}か^かす^す湯^ゆ婆^ばに^にあ^あら^らす^す枕^{まくら}を
 し^しく^くの^の苦^{くる}痛^{いた}と^と助^{たす}け^けら^らす^すと^とあ^あら^らす^すう^うち^ち臥^ふさ^さす^す
 駒^{こま}形^{かた}の^の彼^{かれ}石^{いし}の^の枕^{まくら}と^と出^いで^で常^{じょう}の^の枕^{まくら}と^と引^ひく^くて^て臥^ふさ^さす^す
 朝^{あさ}芽^めと^とう^うち^ち腹^{はら}と^と誰^{たれ}が^があ^あら^らす^すの^の枕^{まくら}と^と引^ひく^くて^て臥^ふさ^さす^す

妨^{さまた}ぐ^ぐ。彼^{かれ}漬^{づけ}桶^{づく}の^のほ^ほろ^ろり^りふ^ふ臥^ふさ^さす^すう^う鴨^鴨ハ^ハ半^{はん}足^{そく}こ^こえ
 動^{うご}く^くが^があ^あら^らず^ず氣^きを^を屈^かむ^むと^と彼^{かれ}と^と争^あむ^む日^ひあ^あら^らず^ず改^か痛^{いた}て
 堪^たえ^えら^らず^ずじ^じり^りに^に密^{ひそ}に^に形^{かた}あ^あら^らす^すう^うち^ち臥^ふさ^さす^す
 也^やも^も改^か熱^{ねつ}く^くて^て苦^{くる}。如^{ごと}此^この^の指^さに^にあ^あら^らす^す石^{いし}枕^{まくら}あり
 夏^{なつ}の^の日^ひの^の枕^{まくら}と^と睡^ねむ^む涼^{すず}風^{かぜ}耳^{みみ}の^の根^ねに^にあ^あら^らす^す叶^か奴^ぬ
 ち^ちも^も勝^かた^たな^なら^らず^ず又^{また}暖^{あたた}か^かす^す湯^ゆ婆^ばに^にあ^あら^らす^す枕^{まくら}を
 し^しく^くの^の苦^{くる}痛^{いた}と^と助^{たす}け^けら^らす^すと^とあ^あら^らす^すう^うち^ち臥^ふさ^さす^す
 駒^{こま}形^{かた}の^の彼^{かれ}石^{いし}の^の枕^{まくら}と^と出^いで^で常^{じょう}の^の枕^{まくら}と^と引^ひく^くて^て臥^ふさ^さす^す
 朝^{あさ}芽^めと^とう^うち^ち腹^{はら}と^と誰^{たれ}が^があ^あら^らす^すの^の枕^{まくら}と^と引^ひく^くて^て臥^ふさ^さす^す

枕石夜話



6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 6 7 8 9 50

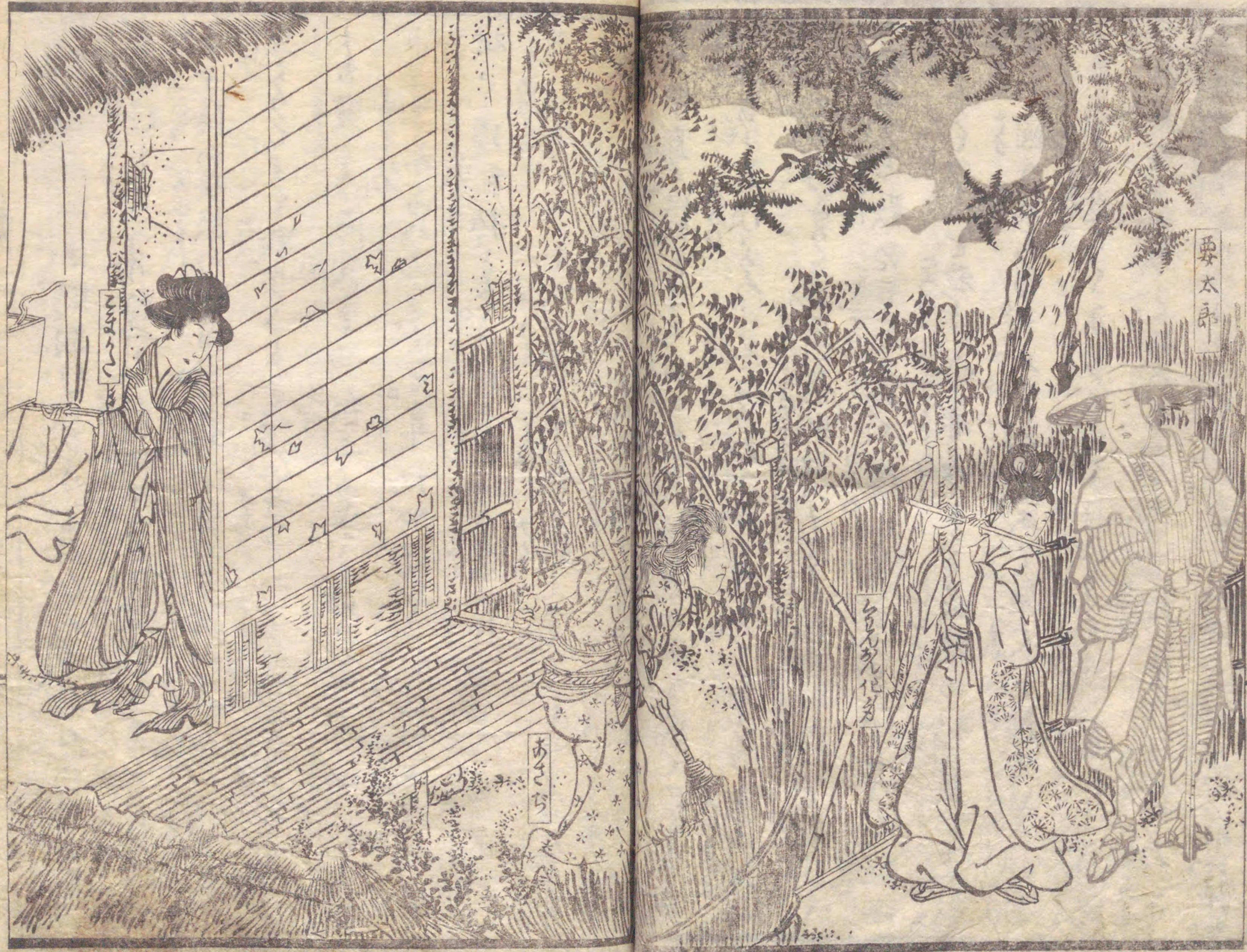
お石夜言

さし申夜より燈火を置きてその熟睡を張ひしり釣る
石の索を如落し打殺す。天の明なる間小屍を川へ流せ
し程ふととある人ありといども血郷の老弱ハ朝芽
が俄頃小姥とあり。又夫鴨ハ死し後その家却富饒
みえゆるを怪し潜小目をつくるものもあれどツケを
まねる一ツ家のりまれば楚と認るうりもあつりたる
とぞ。うづるるる。朝芽ハそのえぐりめより。女兒弱形
みもふく匿し。絶く去らせど。その機密奸智他の
耳目と懸るも足らざるべし。

⑤ 圓通菩薩ニび朝芽を懲らす

附 蛇塚姥が池の事跡

光陰委うく流水のごとく。朝芽が女兒弱形の既十五
才あり容色も人より勝る。かごとく怜れり。かする
田舎あり稀あるべき處女なれど。ふぐり恥人ある見え
む。母の徳慮とや曉ゆり。いづくいづる諫ととも。朝芽ハ
かろりも聴入まじ。こゝろは才が久後の為あり。こゝろは
かろりも親のこころ子あり。こゝろは才が久後の為あり。こゝろは
めづる。母と疎し。こゝろは才が久後の為あり。こゝろは

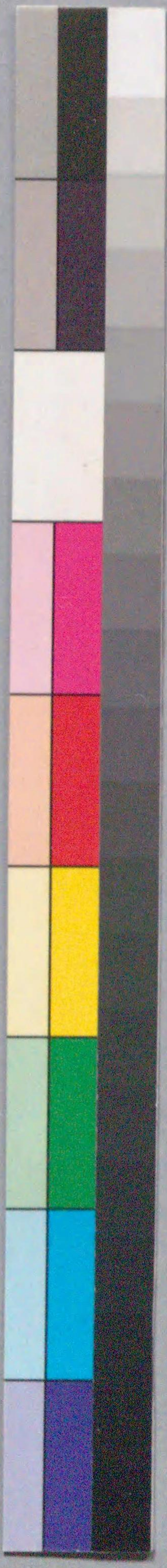
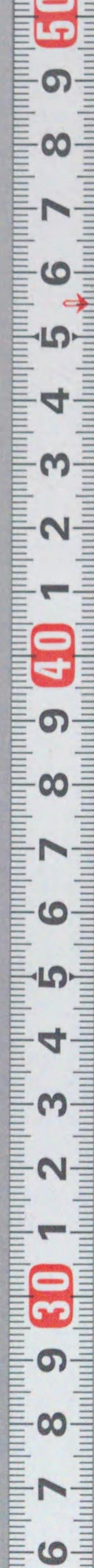


枕石夜話

要太郎

白ん化男

あまのう





枕石夜話

鳥岸信士

あつらひの
 おもひの
 ちとせの
 石

枕石夜話



倒たふまりく。池いけふんぶと沈しづまり。水みづ中なか血ちふまり。あがり。

暁あけもあがり。時ときもあまる。この日ひは七月十日也。觀くわん音おんの

慾よく余あま日ひのり。六むつ奉ほう堂どうの通つう夜や也。里り人にんホホヤヤくもあまり。

あまる。まま彼か亦またの池いけふん人にん投なめり。いい程ほどををあまれ。喘あせくまり。

あまく池いけをを圍ま繞らせり。浩こう亦また風ふう颯さつととあまり。高たか浪なみ逆さか波なみ

洋やうとと洗せんひ。朝あさ芽めハハ半はん才さい大だい蛇だとと變まり。水みづ中なかううあまり。あまり。

紅こうろろ舌した狐こ岡おか。順じゆん礼れいの壯さう伎ぎとと只ただ一ひと口くち飲のんんとと。

とと壯さう伎ぎハハ。ままる。ままる。ままる。ままる。ままる。

一ひと幅はくととり。大だい蛇だのの尻しりふふ。毒どく蛇だハハ。

ぞぞみみぬぬ。これととええる。の戦せん慄りつ。活くわく。

時ときハハ壯さう伎ぎ里りの老らう弱じやくとと。折しや。衆しゆ人にん。

甲けつ夜やハハ觀くわん音おん堂どうハハ系けい糸いと。大だい悲ひの示し現げんとと。

家かの姥うばハハ暴ぼう惡あく。後ご来らいの縁えん故こ狐こ也なり。

か。藤ふじ客かく。石いしの枕まくらとと。石いしをを。

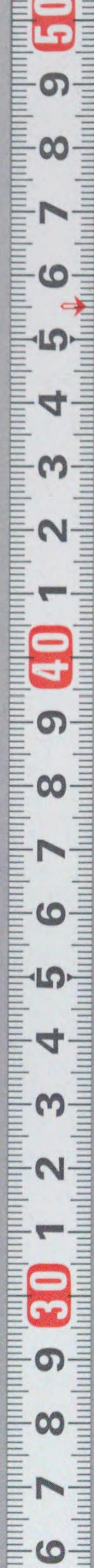
原はら是こゝ。又また戸との郎らうハハ。娘むすめの山やまハハ。

陀だとと。其その。海うみ浪なみをを奪うばひひ。

せんとと。彼かハハ。怨おん靈りやう。崇かうとと。

とと。あまり。戸とハハ。妻つま綾あや袖そでとと。突つ殺ころ。

又また女むすめ兒あなご朝あさ芽めハハ。胎た内うちハハ。



6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 6 7 8 9

枕石夜話

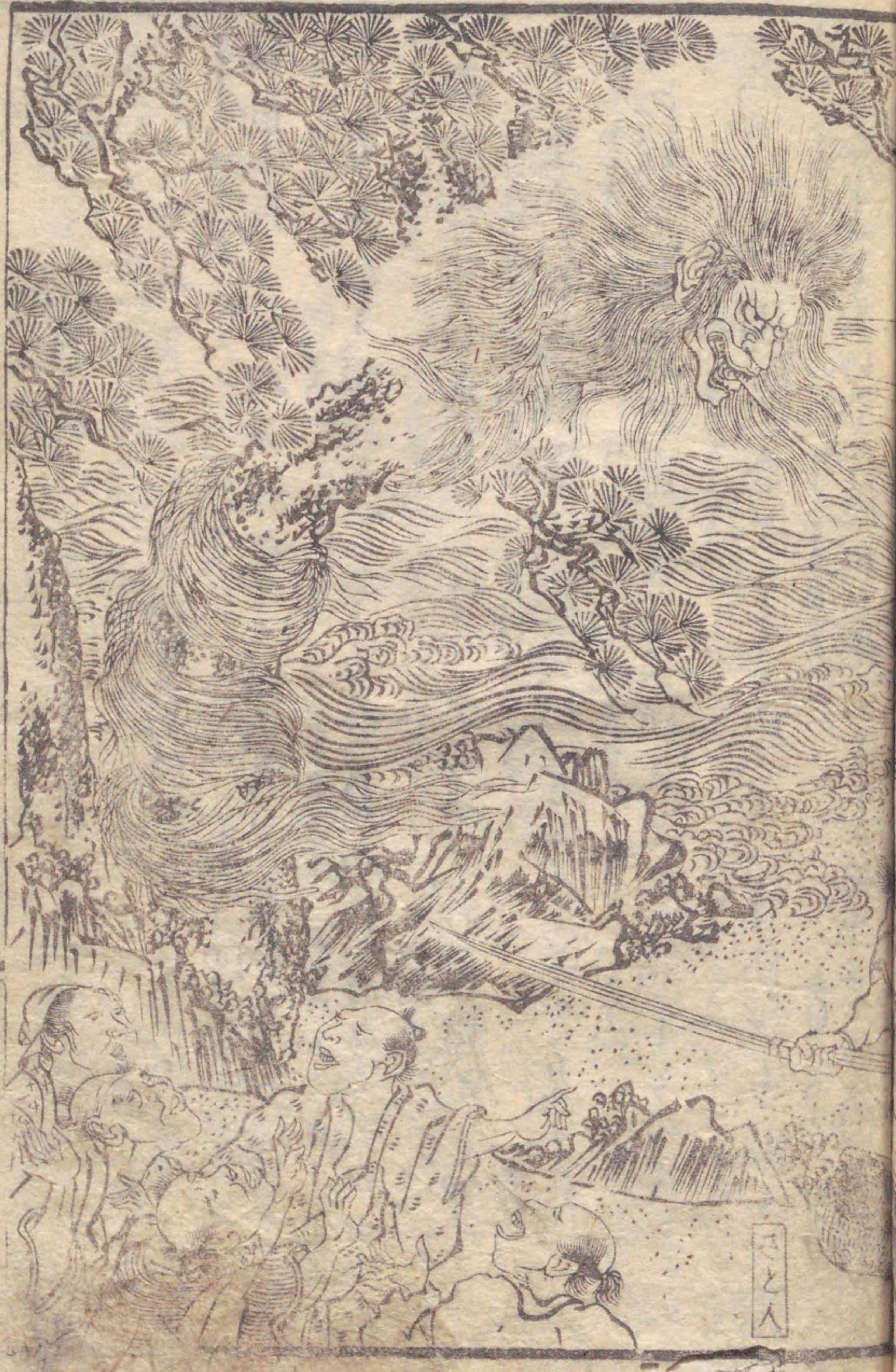
先づ天罰と見え申すにけり。勲ふと申すは、殊ら世に老が牙のうて
てこゝろどしひも果ぬ。順礼の仕度つて立對ひをせられ戸五郎。
故一人生殊に世に。いづゝ眼を。これに故お教めせたる常州
大門村要助道公が二子要き郎。むじまが又多病なるを、別
髪一回圓申す。年を強きともなり。本まどび母との由を
おぼひをそりて申す。ね。さるふら。と。いづゝわら。る。霊場と順
礼。又が生死とを。せ。め。と。祈念する。と。十年おのり。近
曾の武彦おまつ。浅草寺の観音堂お通夜と。する。七日
お及び。今宵大士の示現おのり。又が最良とあり。又難言家

従來の縁故とあり。又仇人の女兒ある。一ツ家の就と教へ。く。
衆人の寛を雪ゆ。今亦汝お環會て。こゝろ。れ。め。量。寿。光。
阿弥陀佛。及観音薩陀の冥助おのり。就念せよ。と。名。
告。け。双。と。閑。く。切。く。菟。且。ぶ。お。ゆ。ら。う。と。戸。五。郎。杖。の。て。
丁と受へ。二合三合おのり。一が要き。と。焦。燥。て。弁。を。
刀お杖の直中。破お。と。刃。突。お。を。つ。と。戸。五。郎。乳。の。下。
ふ。く。破。裂。お。と。血。お。塗。れ。と。倒。と。と。お。の。り。首。を。さ。し。
し。お。が。て。又。の。魂。を。祀。り。と。の。り。一。五。十。と。寺。傍。お。告。
観。音。お。言。ふ。願。と。く。故。郷。へ。立。久。せ。と。縣。主。の。絶。孝。を。

枕石夜話

三

枕石夜話下



枕石夜話下



6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 6 7 8 9

石夜話

賞義しょうぎ。禄ろく。夥た。揚た。り。子孫しそん。多た。く。業ま。多た。く。と。ご。ご。る。福ふく。小こ。里り。入い。
ハ。戸こ。五ご。帝てい。朝あさ。茅ぢ。駒こま。形かたち。ハ。屍しかばね。と。石いし。の。松まつ。と。も。小こ。浅あさ。草くさ。寺てら。の。
後のち。面おもて。小こ。埋うめ。と。と。れ。ハ。蛇へび。塚づか。と。鳴な。び。く。う。蓋はたけ。朝あさ。茅ぢ。ガ。蛇へび。牙がら。と。多た。
ま。ご。の。り。カ。ク。鳴な。ぶ。ア。ヤ。今いま。も。金かね。龍りゆう。山さん。の。背せ。あ。る。田た。の。中なか。ハ。
一ひと。株かぶ。の。獲と。あ。り。と。の。所ところ。ハ。蛇へび。多た。く。一ひと。蛇へび。の。ア。ハ。蛇へび。塚づか。と。い。ふ。そ。の。
と。り。里り。人ひと。ハ。る。何なに。朝あさ。茅ぢ。ガ。怨うらみ。灵たま。の。崇たか。と。多た。く。と。り。の。や。と。陥おち。こ。彼か。
池いけ。の。畔ほとり。ハ。宝たから。倉くら。を。造つく。り。く。兵へい。幼ごう。天てん。を。勸すす。請ねが。い。そ。の。灵たま。を。復たが。
ち。り。り。て。沙すな。渴かつ。羅ら。龍りゆう。王おう。と。と。と。い。ふ。又また。一ひと。鏡かがみ。ハ。彼か。手て。財さい。天てん。ハ。駢へん。
形かたち。と。衆しゆ。と。も。も。り。り。流なが。行りやう。病びやう。あ。る。と。と。た。ハ。竹たけ。の。筒つつ。ハ。體たい。を。

入い。ま。さ。く。社やしろ。の。木き。枝えだ。ハ。懸か。く。祈いの。る。と。死し。ハ。そ。の。病びやう。立た。地ち。ハ。
愈いよ。る。と。も。今いま。ハ。於お。か。く。浅あさ。草くさ。妙まう。喜き。院いん。の。池いけ。を。姥うば。ガ。池いけ。と。稱なづ。て。僅わずか。
小こ。古こ。蹟せき。と。送おく。せ。り。夫それ。惟ただ。ま。ご。念ねん。仏ぶつ。の。功こう。枝えだ。マ。量りやう。不ふ。可か。思し。議ぎ。
り。要よう。者しやう。郎らう。ガ。又また。要よう。助すけ。道だう。ハ。專せん。念ねん。の。行ぎやう。者しやう。と。く。戸こ。五ご。郎らう。
ガ。夫それ。先ま。小こ。り。り。非ひ。令れい。の。死し。ハ。い。せ。り。前ぜん。之これ。の。惡あく。業ごう。う。り。也なり。
是こゝ。非ひ。を。論ろん。む。る。小こ。ひ。を。も。と。と。う。れ。ど。も。又また。ガ。念ねん。仏ぶつ。の。功こう。力りき。ハ。も。と。と。う。
要よう。者しやう。郎らう。ハ。と。え。く。あ。く。ご。る。仇かたき。人ひと。ハ。名な。告つ。あ。ひ。忽たちまち。地ち。ハ。宿しゆく。志し。
と。果たま。く。孝かう。道だう。を。全ぜん。せ。り。又また。要よう。者しやう。郎らう。ハ。最さい。期き。の。冤えん。苦く。う。り。
る。生せい。と。牛うし。鬼おに。ハ。惡い。く。と。く。ど。も。そ。の。子こ。れ。純じゆん。孝かう。と。仏ぶつ。陀た。の。憐あは。れ。

石夜話

6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50

枕石夜話

あふがあふ遂に得脱あつるまふし。あの人昔要ひが枕石
寺の度牒とありき。一念に弥陀とこのまふに要ひ
郎ハ仇と誓ひ至るべうらむ。設要ちうが多年霊場を
噴れし。観世音ふ祈らむ。要ひたえき仏果を
かてうらん弥陀の利剣ハ衆生の煩悩と断。大慈の智
箭ハ凡夫のふふの鬼を射たり。人酔ざれば醒れ惑
ざれば悟らば吾その惑人入と見る。悟る人入と見
嗟夫難うか

敵討枕石夜話卷之下 大尾

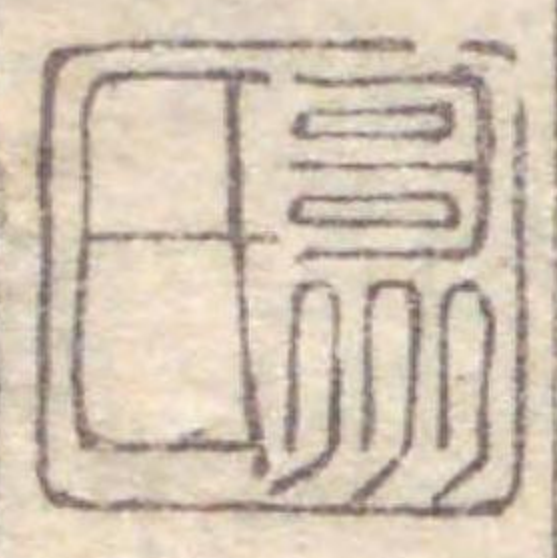
作者

曲亭馬琴



畫工

歌川豊廣



剗刷 朝倉郊八

○戊辰茂販曲亭子新編讀本の外題とる歌

▲為抄や頼豪さん久鳴神ふ三勝佐用媛お染うと雪

▲敵討堤の庵ふ石枕二冊とる川とま中不ん

▲兎のち拍子ぐり名号小綱丸お舞伎傳女おつをハとる
敵討白鳥の関も自伝あり鈴菜ふ甚云の門人此作

枕石夜話下

枕石夜話

文化五年歲次戊辰

春王正月吉日發販

江戸通油町

村田屋次郎兵衛

日本橋新右衛門町

上總屋忠助梓

戊辰新版

慶賀堂藏

巷談坡隄庵

曲亭馬琴著

中本三冊

復雙言猫股屋敷

振鷲亭主人著

全一冊

函嶺復雙言談

感和亭鬼武著

全二冊

繡像宿直物語

式亭三馬著

全部六冊

孝子美談白鷺塚

十返舎一九著

前後四冊

敵討枕石夜話

曲亭馬琴著

中本二冊

敵討枕石夜話

208
2
163

奇談

古今
奇談
紫草紙
五全冊

園差
巷談
菟道園
五全冊

怪談
暎艸
帑
五全冊

戲場訓蒙
會
五全冊

小野蕙
嘘字盡
全

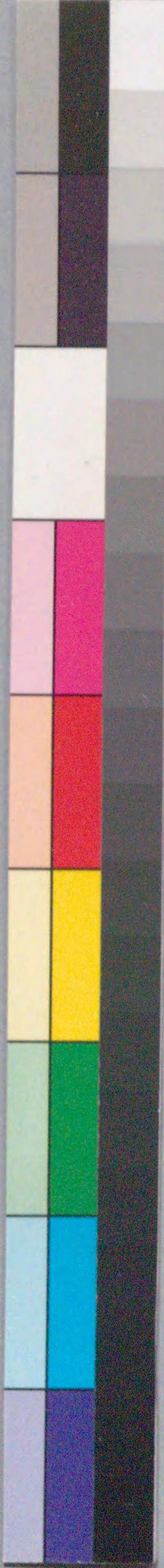
風声
夜話
翁丸物語
二全冊

復做
浪速梅
三全冊

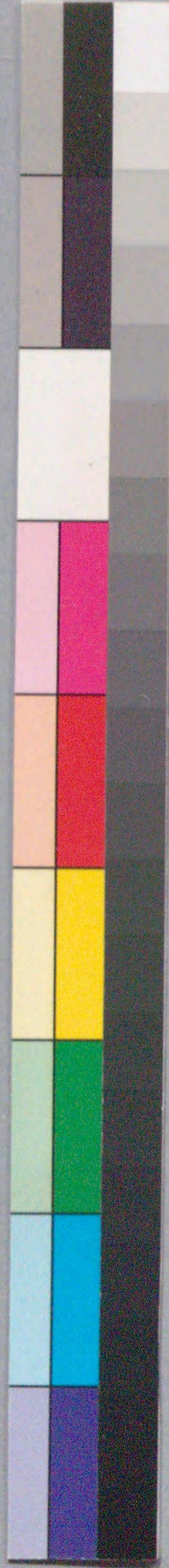
古實
今物語
全六冊

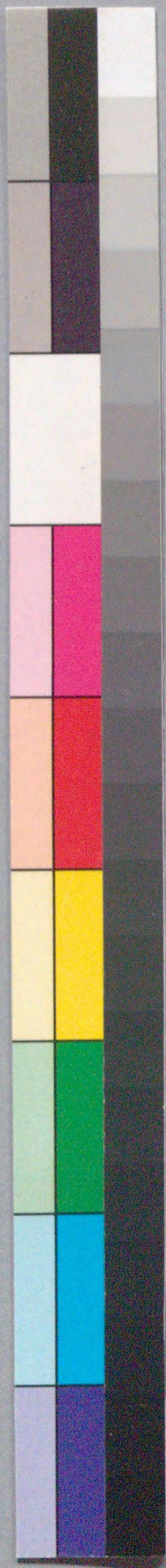
三國
一夜物語
五全冊

自来也
物語
前後五冊



208
合1
163





国立国会図書館 敵討枕石夜話 2巻 208-163

ガラス使用